

携帯が鳴っている。鳴り止まない。でも応答する気にはなれなかった。

「……宗形さん……」

コールが鳴り、切れる。そしてまた数分おいて、鳴る。その繰り返し。マナーモードにはした。でもどうしても電源を切る勇気がなくて。いや、これで宗形の愛情を測っているのかもしれない。

もしかしたら宗形はちゃんと慶人を好きなのかもしれない。あれはやはり見間違いで、もしかしたら宗形はあそこに行っていなかったのかもしれない。もし宗形だったにしても、用があったのは見えなかった同乗者や運転手の方だったのかもしれない。誰かと待ち合わせの可能性だって――でもそれらが有り得ないだろうことは分かっていた。宗形が一卵性双生児でもない限り見間違えることはない。だって本当に大好きで……大好きで……。

「なんでっ……」

ヴヴヴヴヴ……という震えが止まった。携帯を見ると真っ暗になっている。きっと電源が落ちたのだ。(……いい……)

充電はしないことにした。だって充電後にまた電話が掛かってきたら「電話に気付かなくて」という言い訳ができない。このまま放っておけば寝ている間に電源が切れたことにできる。講義が終わって図書館に寄って帰宅して、そしたらちよつと具合が悪くて寝てしまった。携帯は講義や図書館のためにサイレントにしたままだった、とそう言えば――

(……言い訳だ……)

その言い訳をするタイミングすらもう来なくなるというのに。まだ心のどこかで宗形が諦めずにいると願ってしまっている。

電源が落ちていると分かったら普通、それ以上は電話しないだろう。そしてきっともういいやとなるだろう。バイトだって行かなければ縁も切れる。これでいい。だって、慶人で試した玩具は使っていないと言ったのに慶人不在の日にも店に行っていたのだ。

「うううう……」

嫌だ。好きなのに。

もう泣きすぎて頭も痛い。でも涙が止まらない。だって初めての恋人だったのだ。確かに初恋は実らないなんて言ったりもするけれどまさかこんなやつてない。ちゃんと好きだったし、好かれていると思っていた。だって全て知りたいと言ってくれていたのだ。毎日電話もくれていたのに。

(……でも……)

どちらを信じるべきなのだろうか。電話をくれていた宗形か、内緒で店に行っていた宗形か。(信じたいけど……)

でもさすがにあの店に行くなんて。もし行くにしたって一言言ってくれば。でもきっと、あんなところで会うなんて思わなかったのだろう。そういえば講義が休講になったことも連絡していなかった。(もし連絡したら……)

そして公営図書館に行こうと思うと連絡をしていたら宗形もあそこに行かなかっただろうか。

(でもそれじゃ……意味ないよ……)

隠されるよりはこうして早いうちに分かってよかったと思うべきだろう。それにそもそもお客さんだったのだ。そういうプレイが好きで来ていた人。もしかしたら慶人が知らなかっただけでずっと前から通っていたのかもしれない。

動かなくなった携帯電話。それをテーブルに放置して布団に潜り込む。

もう寝てしまおう。壁の時計を見ればいつの間にか時刻は十九時を回っていた。朝のうちに帰宅して、それから一体どう過ごしていたのだろう。昼食もとっていないし、トイレにだって行っていない。多分ずっと床に座っていたのだ。同じようなことをぐるぐるすると何度も何度も考えて。

(もういい、終わった。終わったこと……)

そもそも始まってすらなかった。きつと。だから大丈夫。全て忘れてしまえばいい。

そういえばもらってきた求人冊子はどうしたのだったか。勢いであるだけ全てをもらってきたことは覚えていてるけれど。

(見よう……)

どんなときでも金は必要だ。生活のためなのだから仕方がない。

くくく

風呂上がりで火照った身体。服を着させてもらえないのは恥ずかしいけれど、今は一糸纏わぬくらいがちようどいい。

「……僕のお尻の臭い……確認してください……」

ソファに座る宗形の前で尻を突き出す。そして自分で尻を割り、アナルを開く。

スンという音と共にアナル周辺の空気が動く感覚があった。

「っ……」

「うん……」

スンスン。

「とてもいい匂いだ」

「やっ……」

いい匂いと言われても、それが嘘の可能性だってある。本当はまだ便の臭いが残っていて臭いんじゃないか、と思うけれどまさか自分で確認する気にはならない。

「もうやだ……」

「ダメだよ。これは洗浄の度にするよ。毎日は身体によくないから数日に一回になるけれど、それでも毎回きちんと嗅がせなさい」

「……はい……」

ドキドキする。優しい宗形が好きなのに、こうして命令されると体温が上がっていく。まるで支配されるような、そしてそれを身体が悦んでいるかのような感覚。

「じゃあ今日もゆっくりイく練習をしようか」

「あ……宗形さんは……?」

てつきり抱いてもらえるものと思っていた。だって付き合っているのに練習なんて。

「私はまだ抱かないよ。今激しくアナルを擦ったら強い絶頂をしてしまうだろう。穏やかにいくのが癖になるまでセックスはしない」

「え……や、だって……」

「大丈夫、慶人さんの身体はちゃんと覚えられるよ」

「あの……どうやって練習を？」

「デイルドを使おう。しっかりと吸盤がついているから床につければ騎乗位のように腰を振ることができるよ」

「……それなら……それなら……その……宗形さんのおちんちんがいいです」

どうせ宗形の前でゆっくりイイク練習をするのなら、使うのは偽物ではなく宗形のペニスがいい。

宗形は数回瞬きを繰り返した後、小さく笑った。

「ああ、分かったよ」

でも動こうとはしてくれない。これは仕事の延長なのだろうか。リードしてほしいなんて我儘を言うつもりはないけれど、単純にどうしたらいいのか分からない。

(どうしよう……)

一先ず脱がせたら良いのだろうか。それともキスをしたらいいのか。でもまだ一度もキスをしたことがない。

(ううう……)

やはり言われた通り玩具で練習すればよかった。そしたらアナルに玩具を入れるだけでよかったのに。

「……あの……」

「ん？」

ソファに座ったままの宗形。風呂上がりなのでゆったりした服ではあるけれど、それでもしっかりと衣類を身に纏っている。

「べ……ベッドに……」

「ああ」

ようやく上げられた腰。でも歩き出そうとはしてくれないので慶人より一回りは太い手首を握って寝室に向かう。

「……えつと……」

寝室の場所。まだ一度しか使っていないけれど、なんとなく覚えていてる。

「(こ)……」

「そうだよ」

中に入ってもまだ宗形は自ら動こうとはしてくれなかった。なのでベッド横まで誘導し、ズボンと下着をずらしてペニスを取り出す。

くくく

「お尻つ……舐められて気持ちいい……」

「そうか。これも初めてかな」

「初めてっ……だってお店しか経験がないからっ……」

「そうか。確か私の前に一人接客したことがあったね？」

「んっ……」

「どんな玩具を試した？ どこを触られた？」

「亀頭っ……亀頭……」

「亀頭？」

「はいっ……んっ……」

宗形が言葉を発するときしか舐めるのを止めてもらえない。気持ち良すぎて上手く言葉を発することができない。

「ああっ……」

「こら。きちんと言ってこらっ」

「んんっ……だっつっ……」

尖らせた舌がアナルの皺を辿るように舐める。気持ちいい。

「ほら、お話」

「んっ……亀頭っ、のっ、ろ、たあっ」

亀頭のローター。よくある卵型ではなくて、亀頭に被せるタイプのもの。コンドームの先のような形をしたそれは小さなリモコンに繋がっていて、亀頭を責める振動の強弱を変えることができた。

「ああ、あれか……使い心地はどうだった？」

「あっ……」

答えないといけないのだろうか。正直言うと、あまりの刺激でよく覚えていないのだ。覚えているのはただ、盛大にお漏らしをしまったということだけ。

「やあっ」

「使い心地はどうだったのかな」

「やっ……」

けれど宗形はどうしても言わせたいらしい。慶人が働いていたお店が宗形の持ち物ならつまり玩具開発をしている部署も宗形の会社ということだから、自社製品の使い心地が気になるところだろうか。

「あっ……あああっ……」

しかし話せと言いながらも宗形は舌の動きを止めてくれない。もうほとんど痛みはなくて、少しだけ残った痛みはもう、ただの快感に繋がる刺激になり始めていた。

「言えないのかな」

「あああっ……きもちっ、かったっ」

気持ち良かったのは確かだ。でももしあまり気持ち良くなかったとしても、会社の偉い人に対してそんなこと言えるはずがない。

「どんな風に？ どこをどうされて、どうなったのかな」

「やあっ……」

そんなに詳しく言わないといけないなんて。でもそんな淫らなことを言わされる、というのに興奮す

る。

「あつ……亀頭っ、亀頭っ」

「うん、亀頭はもう聞いたよ」

ああ、そうか。亀頭とは言ったのか——自分が何を言っただけを言っただけで、何を言っただけで何は言っただけでないのか、もうよく分からない。

「亀頭があつ」

「うん……慶くんは亀頭が大好きなんだね」

「ああつ、好きっ、好きっ！」

亀頭が好き。気持ちいいのが好き。でも——。

「お尻も好きっ、気持ちいいよおっ！」

宗形は何も言わなくなった。でも返事の代わりに先程より激しくアナルを舐められる。

「ああつ……あああつ！ ああんつ、あつ」

細められた舌がアナルに入ってくる。ダメなのに。一応洗ってあるとはいえ、中まで舐めたりしたら汚いの。

「ああつ……すごいっ、やああつ！」

ちろちろとアナルを舐められる。でも前に使ったオナホールやエネマグラとは全然違う。だって宗形の舌だから。大きいから、玩具とは違って広い範囲を一度に舐められてしまう。

「すごく良さそうだけれど、そろそろ亀頭ローターの感想を聞きたい。どんな風にされた？」

「ああつ……きと、ろ、たあつ」

「そうだよ。亀頭ローター。大好きなペニスの先っぽブルブルされたらう」

「んっ、されたっ」

「どんな風に？」

お尻の辺りから宗形の気配が消えた。顔が離れたのだ。寂しい。唾液で塗れたアナルが空気に当たってひくひくと動く。

「んっ……おちんちんの先っぽ……皮を剥かれて……ダメなのに、気持ちいいところに玩具をかばってされて……」

「見せてごらん」

「えっ」

「お客さんに虐められたところを私に見せて」

「あ……」

そうだ、仕事とは言え宗形以外の人にされたのだ。

「……やだあ……」

「ダメだよ。見せなさい」

「うう……」

そんな風に言われなければ自分で見せられた。でも他の人ということを実感してしまった。

「さあ、早く」

「はい……」

でも拒絶することもできず、身体を起こしてベッドに座る。

「足を開いて」

「はい……」

膝を軽く曲げて足を開き、ペニスを持って宗形に向けた。

「……可愛いペニス……どこを弄られた？」

「どこ……」

皮を剥いて、ほとんど摩擦を受けたことのないピンク色のそこを宗形に見せた。

くくくく

ローションをまとった指がアナルの表面を撫でた。皺の本数を数えるかのようにゆつくりと指がくるくると回る。

「ああ……きもちい……」

頭がぼうつとする。気持ちいい。

「そう、上手だ」

刺激が強いと思ったらふう、と深く息を吐く。快感逃し。少しずつそれが癖になってきた。

「ああ……んう……はあん……」

何度も何度も撫でられたアナル。数分それが続いた後、つぶんと抵抗もないそこに指先が挿入された。

「ああ……」

「うん、刺激は強すぎないね」

「はい……気持ちいいけど……ゆつたりしてます」

「そう、それでいい。ゆつくり呼吸を続けて」

「はい」

会話をしながらのセックス。きつとそのうち絶頂の瞬間も深呼吸ができるようになるのだろう。

「痛みはどうかかな」

「少しピリピリしますが大丈夫です」

「分かった。ではいった後に薬を塗ろう」

激しく擦ったりはしないのだから、これ以上痛みが増すようなことはないだろう。優しい刺激に目を

閉じ、力を抜いて身を任せる。

「ああ……ふう、ふー……」

「強いかな」

快感逃しに気付いた宗形が指を止めた。

「いえ……もつとも思っただけだったので」

気持ちいいと思いながらも会話ができる。たくさん触られているのが分かるし、何より頭がしっかりと働いているのでどこをどう愛されているのかが分かるのが嬉しかった。

「そうか、きちんと自分で判断ができて偉いな。その様子なら大丈夫そうだし、次は前立腺を撫でるよ」

「はい……」

少し緊張する。射精に直結するようなところを撫でられて、今のまま冷静でいられるだろうか。

「怖いかな」

「……ちよつと……」

「大丈夫、強くしたりはしないよ」

「はい……」

指がもう少し奥まで入ってきた。そしてお腹側の一点をそつと撫でられる。

「あつ……ふう……ふー……」

気持ちいい。気持ちいいので、息を吐く。

「気持ちいいね」

「はい……すごく……すごく気持ちいいです……」

目を閉じて必死に何度も息を吐く。ゆっくり、ゆっくり、と自分に言い聞かせながら。

「その調子だよ……上手だ」

「ああ……はあん……ふう……」

触れるか触れないかのタッチで前立腺が撫でられる。さっきのアナルと同じように、円を描いて。

「今度私がない間にこないだ使ったエネマグラを入れておきなさい。学校から帰宅したらすぐベッドに横になってエネマグラを入れるんだ」

「はい……ふう……」

「そしたら私が帰宅するまでイかないように。最初はイってしまってもかもしれないけれど、快感を逃す練習をするんだよ」

「はい……んう……はあん……は、ふー……」

少しでも強く前立腺に触れると一気に快感の波が押し寄せてしまう。その都度息を吐き、快感を逃がす。

「いつかエネマグラを入れても半日イかずにいられるようになるう」

「半日も……？」

「ああ。おしっこは腰のところにペットシーツを敷いておけばいい。食事は私が食べさせよう」

「あつ……」

エネマグラに前立腺を刺激されながら食事をするところを想像してしまった。いやらしいことをしながら食事をする、というその背徳感。それに何より快感を逃しながらの食事ということに興奮してしまった。きつと普通のペースでは食べられない。一口食べさせてもらう度に深呼吸をして絶頂感をやりすごすことになりそうだ。そしたらきつと食事だつてひどく時間が掛かるだろう。でもそれがまたいやらしい。

「いやらしいことを考えているね？」

「えっ……」

「アナルが締まってる。いけないよ。きちんと息を吐いてアナルを緩めなさい」

「ごめんなさい……」

目を閉じて思考を消す。食事を食べさせてもらいながらのエネマグラなんてまだまだ先の話なのだか

ら、今は想像する必要はないのだ。

「ふー……」

「そう、緩んできた……もつとゆっくり、深く息を吐いて」

「ふー……ふううう……はぁ……ん……」

息を吐く度にアナルが緩んでいく感覚が自分でも分かった。そしてそれと同時に頭がクリアになってきて、前立腺にそつと当てられた宗形の指先の形まで分かるような感覚。

「ふうー……ふうー……」

「そう……いいね……素晴らしいよ」

「ああ……んっ……ふう……」

褒められるとまだダメだ。嬉しくなって感じてしまう。

「そう……アナルを緩めて……お尻からうんちをお漏らしすることを想像してごらん」

「んっ……ふう……」

「そうだ……上手……いきまずに排便するように……そう……」

何度も何度も息を吐いた。そして上手にできれば前立腺を撫でてもらえる。

くくく

「言っただろう？ この身体は私なのだ。だからこのうんちも私の所有物の一つなんだよ」

「やぁ……」

その台詞に少しだけ救われたと感じるのは、やはり汚物によって幻滅されるんじゃないかという恐怖が心のどこかにあったからなのだろう。

「さぁ、エネマグラを出して。玩具が全て出せたらそのままうんちも出してみようか」

「やぁ……」

エネマグラを疑似排便しているせいで、便意の勘違いが生じてしまっているようだった。今のこのいきみ感と残便感果たして玩具によるものなのか、それとも本当に便が下まで下りてきてしまっているのかがよく分からなくなっている。

「あっ……出る……ダメっ」

出したけれど、このままここで出したら床が大参事だ。

「んっ？」

「床っ」

「ああ、大丈夫、洗面器で受け止めるよ」

「やぁ……」

そんな恥ずかしいことってない。でももう出てしまう。

「さぁ、お腹が痛くなる前に出そうね」

「んっ……」

もう出した。宗形がいいと言うのだから、と目を閉じて身体から力を抜いた。

「……いいね……ゆっくりできてる」



「あっ……」

そうか、これも絶頂と同じように穏やかにしないとイケないのか。というより、言われてはいないけれどきつと宗形は何に対しても穏やかさを求めているのだ。

「ん……はぁ……ふう……」

息を吐き、自然にエネマグラが押し出されるのを意識する。けれど形状のせいかスムーズに出すことはできなくて、結局少しだけ力を入れて押し出した。

「んっ……出たぁ……」

「あぁ、上手に出せたね。このままうんちも出せるかな」

「んっ……恥ずかしい……」

でも出そうだ。アナルが解れているからだろうか。もうすぐそこまで便が来ている感覚があった。

「ゆっくり……」

「はい……ん……」

脳内で便が動いていく様子を思い浮かべる。すると思ったよりもスムーズにアナル間際に流れてきた。

「あぁ……ん……んう……」

「ひくひくしてる。うんちが下りてきたかな」

「んっ……もうそこまで来てますっ……」

つい使ってしまう敬語。でも訂正する余裕はない。

「あぁ、アナルが開いてきた。うんちが出るね」

「あぁ……ん……ふう……ふ、ふうー……」

アナルが開いていくのは自分でも分かった。くち……くちゅ……という音がするのはきつとローションと腸液が混ざり合ったからだろう。

「ん……ん、うう……あ……ん……っ……」

アナルが開ききってしまったらもう簡単だった。あとはお腹を凹ませるようにして息を深く吐くだけで便が抜け出て行く。

でも、痛かった。先日切れたところが痛む。きつと治りかけだったところがまた切れてしまったのだろう。でも痛いと言えば宗形を傷付けるような気がして漏れそうになる「痛い」を必死に噛み殺す。

「よし……いいよ……慶人くんはうんちの出し方もとてもいやらしいね」

「やぁ……」

思いきり否定をしたかったけれど、身体に力が入ったらせつかく開いたアナルが閉じてしまう。そしてたらうんちが途中で途切れてしまうわけで、また漏れ出すのを意識するところから始めなくてはイケなくなってしまう。

「ん……ん……う……あ……」

いやらしい水音を立てながら便が出て行く。恥ずかしい。

5万4千文字です。宜しくお願致します。

goneone